

# 説明するための語句や表現を確実に身に付け、相手に配慮しながら自分の考えを伝え合う学習

～6年「I like my town. 自分たちの町・地域」の実践を通して～

西 條 俊 介

## I はじめに

外国語活動・外国語の「深い学び」のためには、「知識及び技能」と「思考力、判断力、表現力等」を不可分のものとして捉え、それらの力を「コミュニケーションを行う目的・場面・状況等」に応じて発揮する学習を構築することが必要である。

全体研究の2年次テーマ「深い学びを実現する学習づくり」を受け、外国語活動・外国語の2年次研究テーマは「語句や表現を身に付ける活動を充実させることで、思いや考えを伝える力を養う英語の学習」と設定した。

「語句や表現を身に付ける」とは、語句や表現を言語活動の中で活用できるようにすることである。活用できるようにするためには、語句や表現の身に付け方を工夫する必要がある。2年次研究においては、語句や表現を身に付ける段階における活動内容や活動方法、活動形態の工夫について、研究を進めた。



自分の考えを伝え合う児童の姿

## II 研究の目的と方法

本研究の目的は、次の3つの視点に基づいた授業実践「I like my town. 自分たちの町・地域」における指導が、思いや考えを伝え合うために効果的であったかどうかを明らかにすることである。研究の方法として、授業における児童の発言やワークシートへの記述等を基にして分析することとした。

- ① 全ての児童が『分かる』『できる』と感じられる指導の工夫
  - ② 言語活動へつながる語句や表現の身に付け方
  - ③ 効果的なフィードバックのための評価規準の具体化
- なお、研究の対象とした単元の概要は以下の通りである。

1 単元名 「I like my town. 自分たちの町・地域」

2 単元の目標

自分の住んでいる地域について説明する活動を通して、地域を説明するための語句や表現を身に付け、相手に配慮しながら積極的に伝えようとする。

3 単元の概要

本単元では、「We have/don't have (a park).」といった自分の住んでいる地域を説明する表現や「amusement park」や「fishing」等の施設・建物や動作を表す語句を身に付け、それらを用いて、友達やALT等と積極的にコミュニケーションを図ることをねらいとしている。

本時においては、特に「話すこと（やりとり）」において、相手に配慮しながら伝え合うことをねらいとした。そのために、相手に配慮する際に必要となる語句や表現（「You have a great idea.」と「Your idea is nice.」）を確認し、文字を用いて板書すること等により、話す際の手助けとなるようにした。

### Ⅲ 結果と考察

#### 1 全ての児童が「分かる」「できる」と感じられる指導の工夫

##### (1) 結果

本実践では、第一の手立てとして、本時までの学習の概要や単元のゴールを教室に掲示するとともに、本時の学習活動を記したカードを板書に順番に示した（写真1参照）。これらは、本時のみならず、これまでの外国語の授業で一貫して実践してきた。児童は、次の活動を板書で確認することで見通しをもち、主体的に学習に取り組んでいた。

第二の手立てとして、扱う語句や表現を示す際には、積極的に文字を用いて板書した。本時の「Greeting」の段階では、ALTが一人の児童を選び、英語で会話を交わした。その会話の中から、HRTが「What place do you like in your town?」という表現を取り上げて板書し、次の「Small Talk」の段階につなげた。「Small Talk」に入る前には、中心となる表現をALTと練習し、児童同士のやりとりを設定した。「Small Talk」では、板書された語句や表現を確認しながら話そうとする児童の姿が多く見られた。

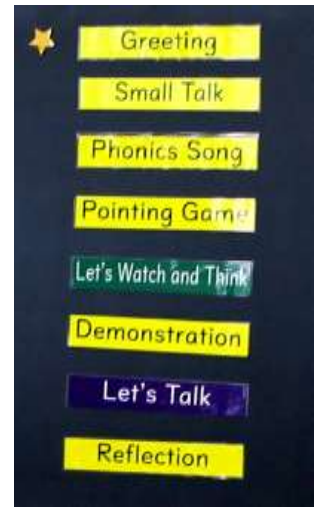


写真1 学習活動の掲示

##### (2) 考察

これまでの学習の蓄積と単元のゴールを掲示したことと、本時の学習活動を順番に示したことによって、児童は単元における本時の位置付けを自覚し、本時の目標や見通しを明確にすることができていた。これらの手立てを本時のみならず、これまでの毎時間の英語の授業で継続して取り組んできたことにより、児童は本時の目標や学習の見通しを、より明確にもつことができたと考えられる。

また、扱う語句や表現について、文字を用いて示したことにより、児童はそれらを頼りにして英語を聞いたり、話したりする活動に取り組んでいた。とりわけ、「Small Talk」等の話す活動では、板書された表現を確認しながら話そうとする児童が多く見られ、その効果は顕著であった。

#### 2 言語活動へつながる語句や表現の身に付け方

##### (1) 結果



写真2 「Pointing Game」の様子

本時では、語句や表現を身に付ける活動として、まず「Pointing Game」を設定した。出題者はALTとJTEとし、児童は、出題者が絵カードの中から選んだ単語を見付け、それを音声で繰り返すという活動である。本時では、10個程度の絵カードの中から、出題者が「選ばない1枚」をまず予想し、その上で活動に入った。

出題者であるALTとJTEは、「単語そのもの (shopping)」を言うことから始め、「該当単語を用いた文 (I like shopping.)」「文意から該当単語を連想する文 (『I want a bookstore.』から『reading』を選択)」というように、段階的に難易度を上げて出題することとした。

もう一つの活動として、「Let's Watch and Think2」を設定した。本活動では、「We Can!2」の動画を用いた。まずは、動画を見せて、どのような単語や文を聞き取ることができたかを問い、聞き取れた言葉を板書した。さらに、繰り返して動画を見せることで、板書された表現に気を付けて聞いたり、他の表現について聞き取ったりした。その後、本時で扱う表現について正しく知り、ALTに続いて発音する練習をした。

## (2) 考察

本時で取り組んだ語句や表現を身に付けるための2つの活動は、どちらも難易度を高めていく段階を意図して組んでいる。児童にとっては、繰り返し同じ活動をしていながらも、少しずつ難易度が上がっていくことによって、活動に対する目的が自然に更新され、知らず知らずの内に技能が身に付いていくという学習活動にすることができた。

特に、「Let's Watch and Think2」では、「聞くこと」から始め、聞き取った語句を文字で表記し、表記した語句を読みながら聞いたり話したりするといった「話すこと」等との関連を重視した。これらが相互に関連し合うことで、確かな技能の習得につながった。難易度を高めていく段階を踏んだ練習の設定は、目的意識と意欲を保ちながら技能を習得することに効果的であったと言える。

その一方で、ゲームを設定すると、「聞くこと」や「話すこと」に活動が偏りがちになるという課題も感じられた。高学年においては、「書くこと」「読むこと」といった要素を、バランスよく組み込んだ活動のより一層の工夫が求められる。

また、本時の学習の振り返りとして、ある児童は次のような記述をした（資料1参照）。

○今日の課題を達成 できましたか。 (A) B・C・D)	できたこと・次に頑張ること・コミュニケーションの楽しさなど
	他の人と会話したりほめ合ったりいなりあそび 感があったからちゃんと会話したりもしました。

資料1 児童の振り返り

本児童は、本時の学習を振り返るにあたり、「ちょっとわざと感があった」という表現を用いている。本時における語句や表現を身に付けるの2つの活動は、それぞれに効果的な手立てであったと言える。その一方で、それらの語句や表現を用いることが目的化した活動になってしまっていたという課題も見える。

英語を介したやりとりは、児童にとって伝え合う必要感のあるものであってこそ価値がある。そうした点で、本児童は、本時のやりとりに「誰かにやらされている」という感覚をもち、少しでもその違和感を消すべく活動に取り組んでいたのだろう。英語を介した真の「やりとり」が可能となるように、発達の段階を踏まえた指導の在り方について、より一層研究を積み重ねていく必要がある。

## 3 効果的なフィードバックのための評価規準の具体化

### (1) 結果

本時の「Let's Talk」では、本時で身に付けた表現を用いて、児童同士が会話をする場面を設定し、評価場面とした。HRTとJTE、ALTは、児童が相手に配慮しながら自分の考えを伝え合っている児童の姿を見取り、肯定的なフィードバックをした。

うまく表現を使えない児童からは、自分から指導者に対して助言を求める姿が見られた。助言を求められた指導者は、板書に書かれている表現を確認させたり、表現の言い方をもう一度聞かせたりして、正しく言えるように指導をした（写真3参照）。



写真3 HRTによるフィードバック

## (2) 考察

本時の評価規準は、「身に付けた表現を使って相手に配慮しながら、相手の発表に対する自分の考えを伝え合おうとしている。」と設定した。「身に付けた表現」とは、「You have a great idea.」と「Your idea is nice.」のいずれかである。よって、児童の姿を見取る際には、これらの表現に着目し、その表現を適切に用いることができているのかを見取った。3人の指導者でフィードバックをしたが、見取る児童の姿が明確であったため、足並みの揃ったフィードバックとすることができた。

また、英語を苦手としている児童にとっては、3人の指導者がいるという環境は、疑問や不安を自ら発信しやすくしたと言える。このことによって、本時で扱う表現が、全体指導だけでは十分に身に付けられなかった児童も、授業終盤に設定した「Let's Talk」の段階で、表現をしっかりと定着させることができた。

評価場面における評価規準の具体化は、HRTとJTE、ALTの3人の指導者が連携して、児童への肯定的なフィードバックを可能にする効果的な手立てであったと言える。とりわけ、英語を苦手としている児童の意欲喚起に効果的であった。

## IV まとめ

本研究の目的は、「全ての児童が『分かる』『できる』と感じられる指導の工夫」「言語活動へつながる語句や表現の身に付け方」「効果的なフィードバックのための評価規準の具体化」という3つの視点による指導が、思いや考えを伝え合うために効果的であったかを確かめることである。本研究における成果と課題は、次のとおりである。

### 1 成果

- 単元における学習の概要や本時の学習活動を順番に掲示することは、児童自身が本時の目標や見通しを明確にして取り組むために効果的であることが明らかになった。さらに、毎時間の学習で継続して取り組むことによって、効果はより増幅していくことも明らかになった。
- 扱う語句や表現について、文字を用いて示した掲示物や板書は、児童が聞いたり、話したりする際に主体的に活用しており、効果的な手立てであることが明らかになった。とりわけ、話す活動においては、その効果がより顕著であった。
- 難易度を高めていく段階を踏んだ練習の設定は、目的意識と意欲を保ちながら技能を習得することに効果的であった。
- 評価場面において効果的にフィードバックするための評価規準の具体化により、HRT、JTE、ALTが連携して児童への肯定的なフィードバックをすることが可能となった。とりわけ、英語を苦手としている児童の意欲喚起に効果的であった。

### 2 課題

- 語句や表現を身に付けるために設定した活動が、「聞くこと」や「話すこと」に偏りがちになってしまった。特に、高学年では「書くこと」「読むこと」をバランスよく組み込んだ活動の工夫が必要である。
- 英語を介したやりとりが、「誰かにやらされている」ものではなく、伝え合う必要感のあるやりとりとなるように、発達の段階を踏まえた指導の在り方について、より一層研究を積み重ねていく必要がある。

## V 主な参考文献

- 小学校学習指導要領解説 外国語活動・外国語編 文部科学省 平成29年6月
- 小学校外国語活動・外国語研修ガイドブック 文部科学省 平成29年6月